

アニメで知る心の世界

こもれ心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：天気の子 5 回目

空想と反逆とエディプスコンプレックス

今回のテーマ

I. 空想と現実の狭間で生きる登場人物

II. 「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く←この途中までやってきた

III. 警察官とエディプスコンプレックス

前回までのまとめ

前回主人公、森島帆高の行動は、「キャッチャー・イン・ザ・ライ（ライ麦畑で捕まえ

て)」の主人公ホールデン・コールフィールドがとった行動と似ており、今までの生活に欺瞞を感じ、そこから抜け出し、大都会に理想を求め、この物語が始まったと述べてきた。それはエディプス・コンプレックスからの逃避であり、儚くも脆く崩れやすいものである。それゆえに理想としていた都会での一人暮らしは叶わず、帆高は仕方なくも須賀への助けを求めた。

そしてそこで出会った人々（陽菜、凧、須賀、夏美この4人）は帆高と同じように心の傷を抱えた人々であり、**現実の喪失や困難を受け入れることができず、万能空想や否認によって現実から逃避しようとする心理構造**をもっており、彼らと交流し、互いに奇妙な形で支え合う中で、帆高は自分自身を見出していくようになる。

帆高とエディプス葛藤

帆高は上京後、須賀、夏美との共同生活を開始する。須賀に叱られながらも日々の仕事に励む帆高は、対等な存在として扱われる中で人間らしい生き方を取り戻し、大人への成長を遂げていく。これはエディプス葛藤に向き合う重要な準備段階となる。

困窮時に出会った陽菜と再会した帆高は、路地裏のホテルで危険にさらされた彼女を助けようとする。しかし金髪のチンピラに馬乗りになられ、殴打されてしまう。この状況は帆高がこれまで経験してきたエディプス葛藤の再演のように映る。

追い詰められた帆高は拳銃を発砲する。拳銃は「男性性」の象徴であり、この発砲は大人達に立ち向かえる力を獲得したことを示している。しかし、それは社会的に好ましくない形での力の誇示であった。

チンピラが怯んだ隙に廃ビルへ逃げ込むが、陽菜は帆高の拳銃使用を責める。これは両者とも社会に背く生き方を良しとしないことへの表れである。その後、帆高が拳銃を投げ捨てたのは暴力的解決を拒絶する誓いの象徴で、この行為により陽菜は心を開き、自分が「晴れ女」であることを明かす。

二人は互いにとって希望の光（「ハレ」）の存在となり、晴れビジネスを展開していくことになる。

「ハレ」と「ケ」

「ハレ」と「ケ」とは、柳田國男によって見出された、日本人の伝統的な世界観のひとつ。

- **ハレ**: 特別な日、儀礼、年中行事など、日常から離れた非日常的な時間や空間を表

す。例：結婚式、お祭り、正月など。

- **ケ**: 日常生活、普段通りの時間や空間を表す。 例：仕事、家事、私たちが日々を送る中で経験する出来事。

→「天気の子」では雨の日がずっと続いており、非日常的な空間などなく、常に同じ日々が繰り返されている。雨は登場人物にとって息苦しさ、孤独感、閉塞感を象徴であり、彼らには「ハレ」などなく、「ケ」が永続的に続いていることを意味している。

陽菜の社会的役割の獲得と自己犠牲と「ハレ」

帆高と陽菜が知り合った後、二人は深い関係性を築くのではなく、晴れビジネスを展開していく。このビジネスは表面的には問題解決への取り組みに見えるが、実際には陽菜が母の喪失という根本的な痛みと向き合うことを避け、周囲の期待に応えることで自分の存在価値を確認しようとする、ある種、病的な適応だったとも言える。天気をコントロールできるという万能感は、母の死への否認から生まれた躁的防衛であり、その結果陽菜の身体は透明化していく。これは自我を過度に捨て、他者に合わせ続けた象徴的表現である。神社の神主が夏美と圭介に龍の天井画を解説する場面では、天気の巫女について「人の切なる願いを受け止め、空に届けることのできる特別な人間」と説明される。晴れ女である陽菜は、まさにこの巫女的存在であった。

『君の名は。』の三葉が高校生でありながら宮水神社の巫女を務める設定と同様に、巫女は神を祀り、神に仕え、神意を世俗の人々に伝える役割を担う。村の人々と神との間を繋ぐ存在として、村のアイデンティティの象徴となる。吉本隆明は巫女を「村の共同幻想と融合している」存在と捉えていた。

陽菜が晴れ女であり続けることは、『君の名は。』の当初の三葉同様、巫女としての生き方を選択することを意味する。超自然的能力によって東京の天候という共同幻想的要請（みんなの願い）に応え、最終的には「犠牲」として消失する運命を背負う。

この状況を変えるには、『君の名は。』の瀧のように、陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、救い出す存在が必要となる。それが帆高である。陽菜と帆高が互いを思い抱く幻想を、吉本隆明は対幻想と呼んだ。共同幻想と対幻想は逆立するとされるが、精神分析的にはそれこそが自我の目覚めなのである。

しかし現時点での帆高と陽菜の関係性は、『君の名は。』で瀧と三葉が入れ替わりながら深い情緒を共有するレベルには達していない。まず二人が深い関係性を築くことが重要である。

→そこで凧と帆高のやり取りを前回取り上げた。

凧の提案と帆高の葛藤

陽菜の弟の凧に帆高は陽菜への誕生日プレゼントに関して相談するが、帆高の煮え切らない態度に凧は単刀直接にアドバイスを送っている。それは凧自身が陽菜と帆高に付き合っていて欲しいと考えているが故のアドバイスと考えられる。

凧、陽菜、帆高という名前を考えたときに、興味深いことに、陽菜（太陽）と帆高（帆を上げた船）という希望に満ちた航海のイメージに対し、凧という名前は「風が静まる」ことを意味し、一種の「停滞」を暗示している。実際、晴れビジネスを一緒にするなかで、陽菜、帆高、凧の3人の関係は非常に活気あふれたものになったが、同時に陽菜は「お姉ちゃん」としての役割に縛られ、帆高との関係も「三人組」の枠内に留まりがちであった。それでも凧は二人の関係の発展を望んでおり、帆高の陽菜へのプレゼントについて即座に「指輪」と答えた。「指輪」は一般的に永遠の絆、約束の象徴であり、この関係が長く続いて欲しいという凧の願いを表している。そして凧が「姉ちゃんには、もっと青春っぽいことしてほしい」と語ったように、陽菜が自我を持ちイキイキとした生活を送って欲しいという思いを帆高に伝えているように感じられる。

その凧の言葉に後押しされるかのように帆高は指輪を買いにデパートに行く。このとき三葉に帆高が会おうのは象徴的である。『君の名は。』との対比構造として、三葉は既に「巫女的運命」から解放され、瀧との対幻想によって自我を取り戻した存在である。一方、帆高はまさにこれから陽菜を「巫女的犠牲」から救おうとしている段階にある。指輪という「結びつき」の象徴を買う場面で、既に救済を成し遂げた三葉と会おうことは、三葉が瀧によって救われたように、今度は帆高が陽菜を救う番であることを示している。これは新海誠作品における「救済のリレー」のような構造を呈しているようにも感じられる。

その後、帆高が陽菜にプレゼントをあげようとしたときに陽菜の秘密が語られる。

帆高：陽菜さん

陽菜：帆高（タイミングがぶつかる）

帆高：あ！ごめん

陽菜：あ、ううん　なに、帆高？

帆高：いや……別に陽菜さんこそ、なに？

陽菜：あ、うん——

陽菜：——帆高、あのね

陽菜：私——

陽菜の周りに水が舞っている。次の瞬間に突風が吹き、陽菜の傘と上着が飛ばされてしま
う

帆高：あっ！

帆高：陽菜さん！！

帆高の目の前には誰もいない。遠方から陽菜の声が聞こえる

陽菜：——帆高っ！！

陽菜は街灯より高い場所に浮いていた。その後しばらくして陽菜の爪先がアスファルトに
着くと、そのまま彼女は膝から崩れ落ちてしまう。

陽菜：私が晴れ女になったのはね——　　1年前の、あの日

陽菜：去年、お母さんが亡くなるちょっと前にね——　私、一人であのビルの屋上に登っ
たことがあるの　そこはまるで、光の水溜りみたいだった。雲間から一筋だけ陽が差して
いて、その屋上を照らしてたの。あの廃ビルおん屋上には一面に草花が咲いていて、小鳥
がさえずっていて、朱い（あかい）鳥居が陽射しに光っていて

（回想シーン）陽菜が手を合わせながら鳥居をくぐる。彼女が強く祈る中で雨の音が突然
消え、彼女が目を開くと彼女は青空の真ん中にいた。そこで陽菜は雲の上の草原、そして
キラキラと煌めきながら泳ぐ空の魚達を見る。

陽菜：気づいたら私は鳥居の下に倒れてて、空は晴れてた。久しぶりの青空だったの。あ
の時から私はね、空と、繋がっちゃったんだと思う。

【考察】

このシーンで、なぜ陽菜が巫女となったのか精神分析的に考えていきたいと思う。

「あの時から、私は空と繋がっちゃったんだと思う」

この陽菜の発言は深い心理的意味を含んでいると考えられる。

ウィニコットは躁的防衛の特徴の一つとして、「内なる現実の人々を"生きたまま仮死状態"にしておくこと」を挙げている。陽菜の発言はまさにこの状態を象徴している。晴れ女として万能的な存在となった陽菜だが、実際には母の喪失を受け入れられず、彼女の内的世界において良い母（良い対象）と悪い母（悪い対象）の両方を保持したまま、それらを万能的に支配するという躁的防衛の状態に陥っていたと考えられる。

また、吉本隆明の共同幻想論の観点から見ると、巫女となった陽菜は共同幻想（社会が求める「晴れ」への願望）と自己幻想（母の喪失に対する個人的な防衛）を融合させることで、個としての自我の境界を曖昧にしている状態とも言える。この融合こそが、陽菜の自我の消滅を招く危険性を孕んでいるのである。

この万能的支配により、確かに悪い母を制御することは可能となるが、同時に良好な関係性もすべて停止されてしまう。その結果、陽菜自身の内面が死滅してしまうことになり、これは前述の通り自我の消滅を意味するものである。

陽菜はそうのように巫女になることで、「ハレ」を自身で制御するという万能的支配を持とうとし続けたのだと考えられる。しかし、それは先に述べたように自我の消滅である。

その陽菜を助け出すには、前述の「君の名は。」で瀧が深く三葉の内面に入り込む中で三葉を救い出したように、帆高が陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、彼女を救い出すことが不可欠なのである。

6) 刑事たちの追求と「ケ」

その後、陽菜の家に刑事と女性警官が訪れ、帆高がいなくて事情聴取される。そしてここに保護者がおらず、子ども達だけで生活しているのは問題だと指摘され、後日児童相談所の介入が入ることとなり、これまでの生活が大人達によって壊されることになってしまう。警官は父の象徴であり、超自我対象である。ある意味、彼らは帆高達にこれまでの夢の出来事から別れを告げ、現実と向き合えと言っているように感じられる。

しかし帆高達3人は逃避行をすることにする。それはまさにキャッチャー・イン・ザ・ライの主人公ホールデン・コールフィールドの逃避行のようである。途中夏にも関わらず、大雪が降り、交通機関が大きく乱れ、警察に補導されかけるも命からがら逃げ出し、どうにか場末のラブホテルに泊まることができた。そこで3人はカラオケに興じたり、枕投げをしたりと束の間の楽しい時間を過ごす。

そのなかで帆高は思う。

——もしも神さまがいるならば、
お願いします。もう十分です。もう大丈夫です。僕たちは、なんとかやっていけます。
だから、これ以上僕たちになにも足さず、僕たちからなにも引かないでください。
神様、どうか、どうか。僕たちを、もうすこしだけこのままでいさせてください。

そのように帆高が祈るということは、このひときは長くは続かないということに気がついているのだろう。

その後、0時を過ぎて、陽菜の誕生日になった時に陽菜と帆高で取り交わされた会話を次回取り上げて、考察を進めていく。